

秋 暑 し

—追悼菊池先生—

福 嶋 野 城 子

(両津市両尾)

I

あれは、昭和22~23年頃の晩夏の頃であったらうか。

南方戦線から、からくも故郷に帰って来た私は、衰えきった体と、ひどい精神の疲れのままに、なすこともなくぼんやりとその日その日を過して、時々近くの海辺へ出かけ、白い砂の上に腰を下ろしたり、幼い頃親しんだ岩に停ったりしていた。

そんなある日、いつもの浜辺で、つば広の麦稈帽を目深にして、深く踏みこむ姿勢の老人(と私はその時思ったのだが)に出会った。

老人は、名を告げるでもなく、当然私を知っているらしく近づいて来て、この浜辺の貝の種類の多さや、いくつかの小貝を掌にしてその名を教えてくれた。丹念に小貝を拾いつづける老人を後にして私はそのまま家に帰った。その頃私は人とかかずらあうことを意識して避けていた。誰に会うのもわずらわしかったのである。それでもその夜、父に話して誰なのかを確かめてみた。父も母も、ああそれならきっと先生にちがいないとの答えであった。いまはすでに亡いが父も母も菊池先生とは同年令で小学校を共にしていたのである。父は事情があって中学を途中で止めたが、中学でも先生とは学年を同じにしていた筈である。

これが私が菊池先生にお会いしたのはじめである。

人生には、不思議に初印象が忘れられない人が幾人かはいるものであろうか。その後先生とは、いろんな機会に接することとなるのであるが、私の中の先生は、いつもあの日の先生がその奥にいられつづけている。少年のようなひたむきさと、どこかに孤独の影をもつ長身の老人の姿。逝く夏の陽に照らされている麦稈帽のつばさの広さ、人影の少なくなった浜辺——

II

知人のすすめのままに高校の教師となった私は、そこ

でまた講師として時々来られる先生にお会いした。隣の教室で講義される先生のお声は、なかなか大きくて、私の授業は圧倒される思いであった。勿論先生は「生物」を教えられていたが、教科書は、すでに博物学ではなく分子生物学が内容の主体になっていた。それでも先生は、先生らしく独特の教科書を問題とされない教え方をされていた。私は、なる程と教えられるものが多くあって、いくつかの愚問を試みてみたりしたのだった。

ある日先生は、休みの時間に、外国の研究レポートを読んでいられた。不躰な私は、何処の国のものですかとおたずねすると、スウェーデンであったか、デンマークであったか、ともかく北欧の国のものとのことであった。実は、私にはレポートの内容に関心があったわけではなかった。それよりも型の異った封筒に貼られた切手の美しさにひかれていたのだった。

小学生だった長男が切手の収集をはじめた頃で、彼は僅かな小遣いを貯めては、1枚2枚と外国切手を求めていた。じつとながめたり、すかして見ていたりするのだが、いじらしかったのである。先生にそのことを話すと、先生はああと答えられ、先生も外国の切手を数10年来あつめていられ、研究に疲れたり夜半などは時々ながめられるといわれ、早速次の日に20枚程同じものがあつたからともって来て下さった。息子はやがていつの間にか切手の収集を止めてしまって、別のものに興味が移って行った。しかし先生は、今でもつづけていると思いつづけているらしく、家内がバスの中や街中で挨拶する度に、きまって息子さんは元気ですか、その後どれだけ集りましたかと聞かれる。話はそれ以上でも以下でもない。2人の共通話題はそれがすべてで、それで止まるのである。そして、その度に先生の温かさが、確かな手ごたえで伝わってくるというのである。息子は一度だけであったが佐和田町の佐渡博物館での会議に出かけた私を車で迎えにやって来たことがあった。先生はバスで帰ら

れるらしかったが、おすすめすると、小型車のワンドアの車に、長身を折り曲げられるように、きうくつそうに乗られたことがあった。息子に今度は直接切手のことを話しかけられたが、すでに大学生の彼は、あいまいな微笑をしながらハンドルを握っていた。帰ってから息子も、温い人だなあと私にもらしたのである。

III

両津市の文化財の委員会や佐渡博物館での会議では度々先生と同席したのであったが、いつか塩浜の習俗や製塩器具のことなどが問題になったことがあった。先生は異常なと思われる程の情熱で多くの慣行や具体的諸道具、また労働の仕方について他を圧する口調で述べられた。少年時先生は塩畑の労働を毎日見られ学生時代も休暇などでは手伝ったらしかった。

李紳の有名な詩がある。鋤禾日当午 汗滴禾下土 誰知盤中飧 粒粒皆辛苦 べつに先生からこの唐詩を聞かされたわけではないのであるが、中世はさておき近世の農民もまた粒々皆辛苦の労働を行なって来たのである。明治にもそれはうけつがれ、少年であった先生の周囲は、まさにそのようなものであったにちがいない。およそ幼時、少年期の、まわりの影響こそが、その人の人間的成長へは決定的なものを与える。先生のインテリジェンスは、周辺の人々より一きわ高く、また深かった。それゆえに先生の孤独の影はいよいよ濃かったわけでもあるが、たまの休日、先生は、海近い畑に村人の誰とも異ならず、鋤をふるわれ、肥料の桶を肩にされていられた。労働、汗——努力こそが先生の生涯を貫く1本の棒の如きものではなかったか。それは、おのずから農民の魂、あるいは根性とも言われることが可能である。

IV

さもあれ、先生を憶う時、私はもう一つの光景を忘れることができない。

あれは、確か秋の1日のことである。私達は博物館での会議を終えて、隣のホテルへ出かけることとなった。皆よりやや後れて、近道の松林の中を行こうとする私のやや前の方に、1人でゆっくりと歩まれる先生の姿があった。

枝下の長い赤松の美事な林の中、やや浩然と長身をのばして行かれる先生の後姿。私はふと、突然ではあったが、ここに明治があると思った。勿論先生は生年こそ明治であるが、学生時代は大正の世の中であつたし、活躍されるのは昭和なのだから、時系列の中ではそんなことはないのだが、秋のやや夕陽というには明るい陽が射しこむ林の中を行く長身でどこか角張る先生の後姿は、私にそんな感慨をいだかせた。けなげで、ひたぶるで、どこかに今は哀愁をただよわせるもの、毅然と眉高く遠くをみつめる瞳と、どこかに一沫のかなしさを秘めるもの——まったく私の独断もいいところであるが、そんな思いをもったことを否定できない。

V

先生の突然の訃報は私を驚かせ悲しませたが、臨終の御様子を追々聞くにつれて、私は確かに1人の人が逝ったことを自分で納得した。そして、それは如何にも先生らしい死であったとも思った。そして、そこにさすがにじささえも感じたのである。

葬儀の日、両津市長の弔詞を代読した後座にもどり、目をつむりつつ、先生の生涯は果して何であったのであろうか、私にとって先生は如何なる位置を占めるのであろうかとありし日の温顔をまぶたにうかべつつ考えつづけたのである。

(夏はすでに去り、秋の気は鳥をすっぱりつつんでい
る。冷夏の後の暑い初秋である。

菊池先生を偲びて

秋暑し雀が歩く浜の隅 野城子)